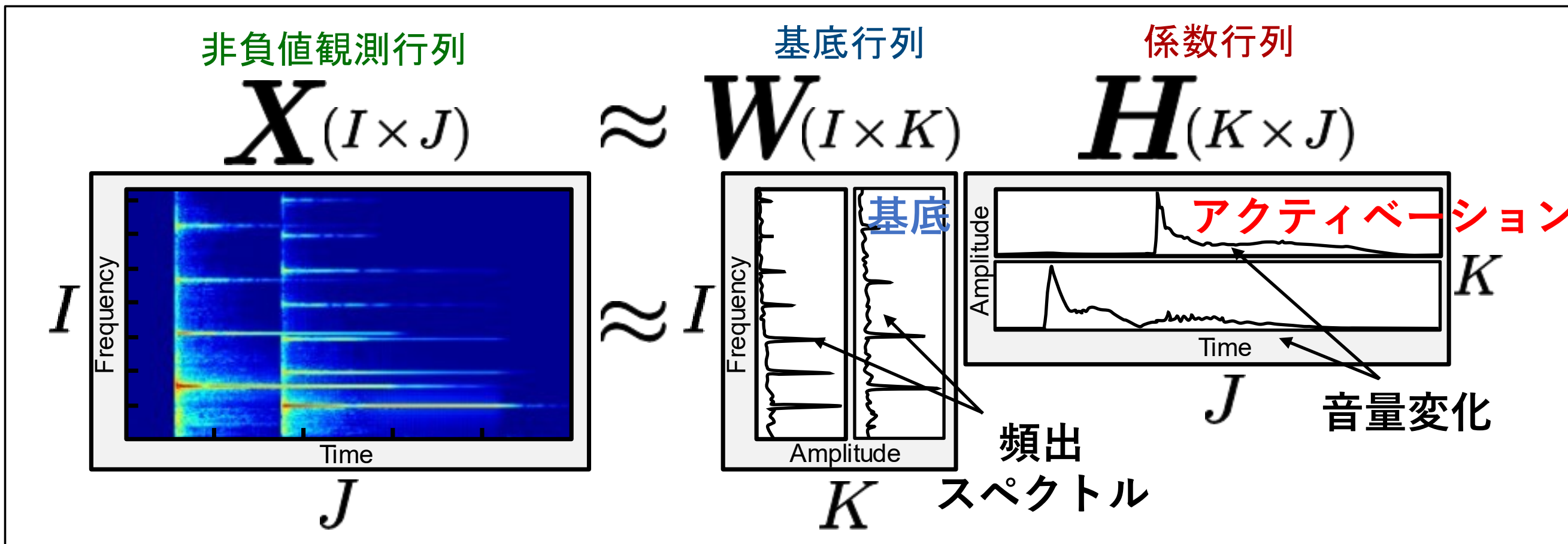


本発表の概要

- 非負値行列因子分解 (nonnegative matrix factorization: NMF) は様々なタスクに活用可能
- 事前モデルを導入し最適化を誘導する正則化付きNMFが各種提案されてきた
 - L1ノルム正則化によるスパース性の誘導 (スパースNMF)
 - 連続性正則化によるスムーズ性の誘導 (スムーズNMF)
- スパース性とスムーズ性を同時に表現できる新しい正則化付きNMFを提案**
 - **ディリクレ事前分布を仮定した最大事後確率推定によるNMF (ディリクレNMF)**
- 制約条件付き補助関数法を適用し反復更新式を導出
- 乱数を用いた数値実験ではスパース・スムーズな基底を完全に推定

1. 研究背景

- 非負値行列因子分解 (nonnegative matrix factorization: NMF) [Lee+, 1999]
 - 観測非負行列を別の2つの非負行列の行列積で低ランク近似する手法
 - 音響信号では時間周波数のモデリングに頻繁に用いられる



2. 正則化付きNMF

- スパースNMF** [Hoyer, 2004], [Le Roux+, 2015], [Marrim+, 2023]等
 - NMFの変数行列をスパースに誘導する**L1ノルム正則化**付きNMF

$$\text{Minimize } \mathcal{D}(X|WH) + \mu \|W\|_1 \text{ s.t. } w_{i,k}, h_{k,j} \geq 0 \forall i, j, k, \|w_k\|_1 = 1 \forall k$$

- スムーズNMF** [Virtanen+, 2007]等
 - NMFの変数行列の列や行をスムーズに誘導する**隣接差分正則化**付きNMF

$$\text{Minimize } \mathcal{D}(X|WH) + \mu \sum_{i,k} |w_{i,k} - w_{i-1,k}|^2 \text{ s.t. } w_{i,k}, h_{k,j} \geq 0 \forall i, j, k, \|w_k\|_1 = 1 \forall k$$

スパース性とスムーズ性の両方を同時に扱える正則化は無かったNMFのWとH間のスケール不定性の存在は正則化において要注意

- 事前分布の最大事後確率推定 (MAP推定) に基づく正則化付きNMF
 - 基底行列Wが事前分布p(W)に従うと仮定するMAP推定NMF

$$\text{Minimize } \mathcal{D}(X|WH) + \mathcal{R}(W) \text{ s.t. } w_{i,k}, h_{k,j} \geq 0 \forall i, j, k$$

→ $\mathcal{R}(W) = -\log p(W)$ は事前分布由来の正則化項

新規性 ディリクレ分布をNMFの事前分布に導入
スパース・スムーズを同時に扱いつつスケール不定性を回避

3. 提案手法

- ディリクレ分布
 - 非負制約とノルム制約を満たす確率変数ベクトル (標準単体上のベクトル) の分布
 - 標準単体の定義
 - ディリクレ分布の確率密度関数

$$\mathcal{S}_{I-1} = \left\{ x \in \mathbb{R}^I \mid x_i \geq 0 \forall i, \sum_i x_i = 1 \right\}$$

非負制約 ノルム制約

$$x \sim p(x; \alpha) = \frac{1}{B(\alpha)} \prod_i x_i^{\alpha_i - 1}$$

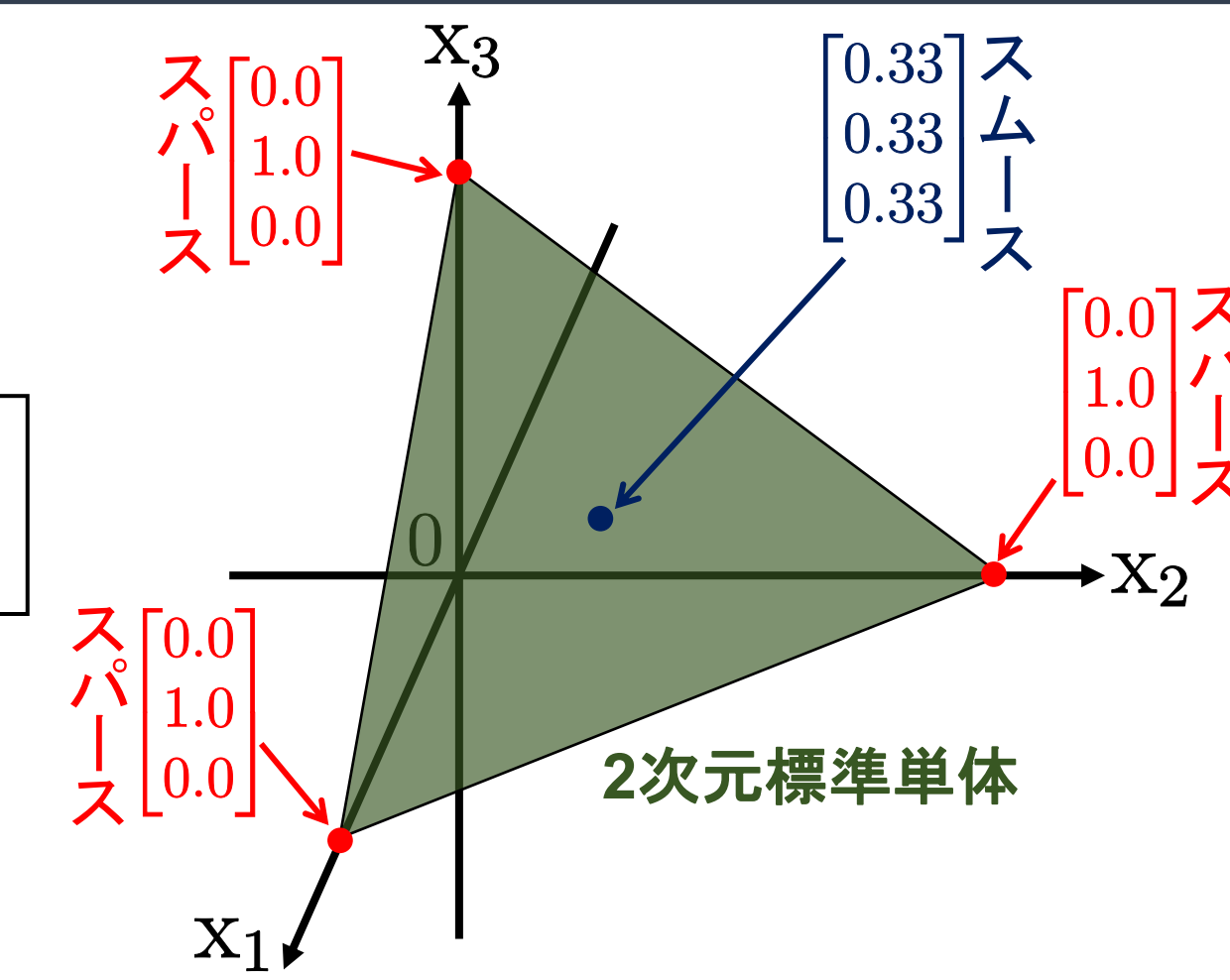
確率変数ベクトル パラメータ多変数ベクトル $B(\alpha) = \frac{\prod_i \Gamma(\alpha_i)}{\Gamma(\sum_i \alpha_i)}$ ベータ関数

- 3次元確率変数ベクトルの場合
 - 2次元標準単体上の確率変数ベクトル (3変数だがノルム制約より自由度は2)

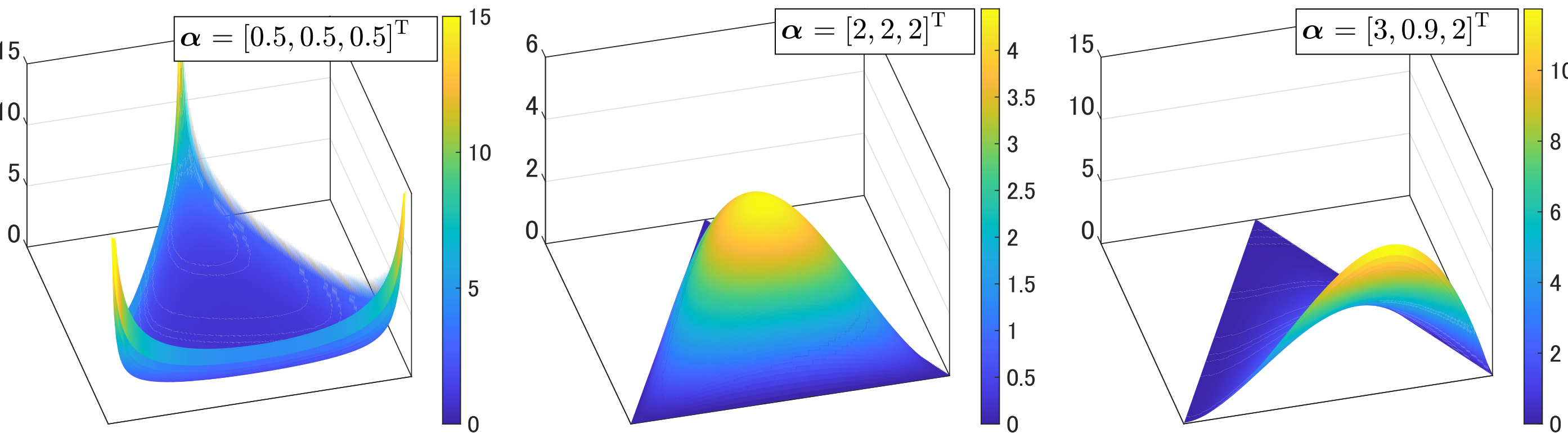
$$\text{3次元確率変数ベクトル } x = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix}$$

ノルム制約: $x_1 + x_2 + x_3 = 1$
非負制約: $x_1, x_2, x_3 \geq 0$

例えば... $x = \begin{bmatrix} 0.2 \\ 0.3 \\ 0.5 \end{bmatrix}$, $x = \begin{bmatrix} 0.1 \\ 0.1 \\ 0.8 \end{bmatrix}$, $x = \begin{bmatrix} 0.0 \\ 0.9 \\ 0.1 \end{bmatrix}$ 等



- パラメータベクトル $\alpha = [\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3]^T$ は確率密度の各頂点への集中度に対応
 - スパースやスムーズなベクトルの生成確率密度を α で制御可能



- ディリクレNMFの目的関数と最適化の方針

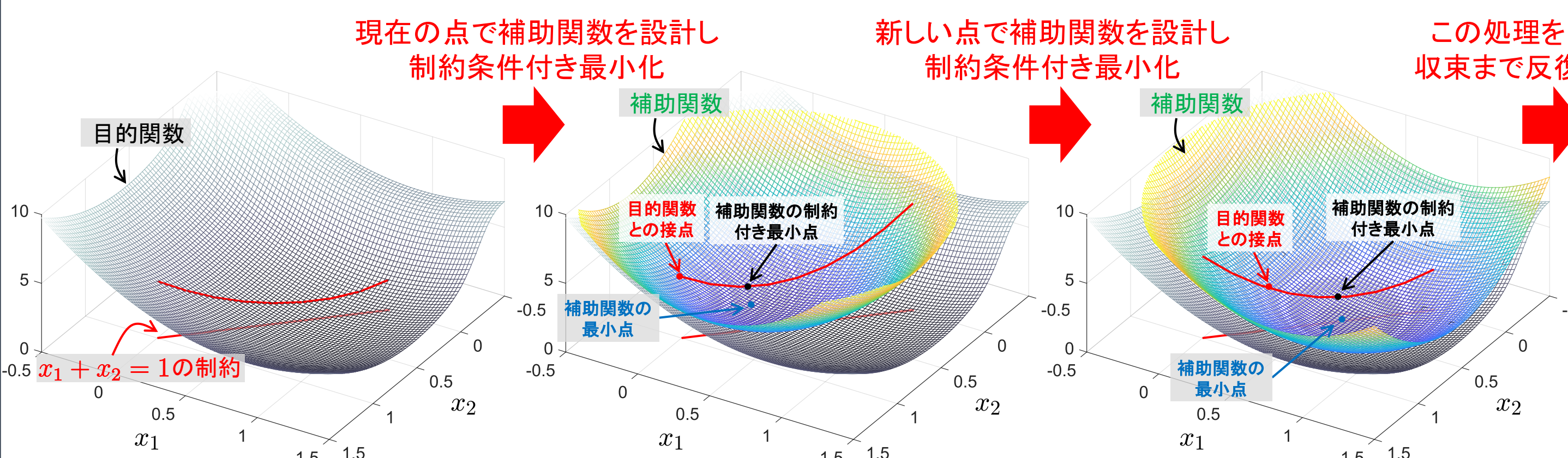
- ディリクレ分布から基底行列の各列 (基底ベクトル) が独立に生成されると仮定

$$\text{Minimize } \mathcal{D}(X|WH) + \sum_{i,k} (\alpha_{ik} - 1) \log w_{ik}^{-1} \text{ s.t. } w_{i,k}, h_{k,j} \geq 0 \forall i, j, k, \sum_i w_{ik} = 1 \forall k$$

- NMFでは常套手段の補助関数法を用いるが、ディリクレ分布由来のノルム制約を陽に扱って解く必要がある → 補助関数法の上限関数最小化に制約条件を付与

- 制約条件付き補助関数法

- 「本来の目的関数に対する最適化問題の制約条件」を「補助関数の最小化問題」にも引き継いで考慮しながら最小化



- 補助関数の非負制約・ノルム制約条件付き最適化問題

$$\text{Minimize } \mathcal{J}^+ \text{ s.t. } w_{i,k}, h_{k,j} \geq 0 \forall i, j, k, \sum_i w_{ik} = 1 \forall k$$

- 補助関数の最小化問題に対して非負制約とノルム制約の両方を考慮
- 一般化KL擬距離に対する補助関数とディリクレ分布由来の正則化項(そのまま)

$$\mathcal{J}^+(W, H, \Delta) = \sum_{i,j} x_{ij} \log x_{ij} - x_{ij} \sum_k \delta_{i,j,k} \log \frac{w_{i,k} h_{k,j}}{\delta_{i,j,k}} - x_{ij} + \sum_k w_{i,k} h_{k,j} + \sum_{i,k} (\alpha_{i,k} - 1) \log w_{i,k}$$

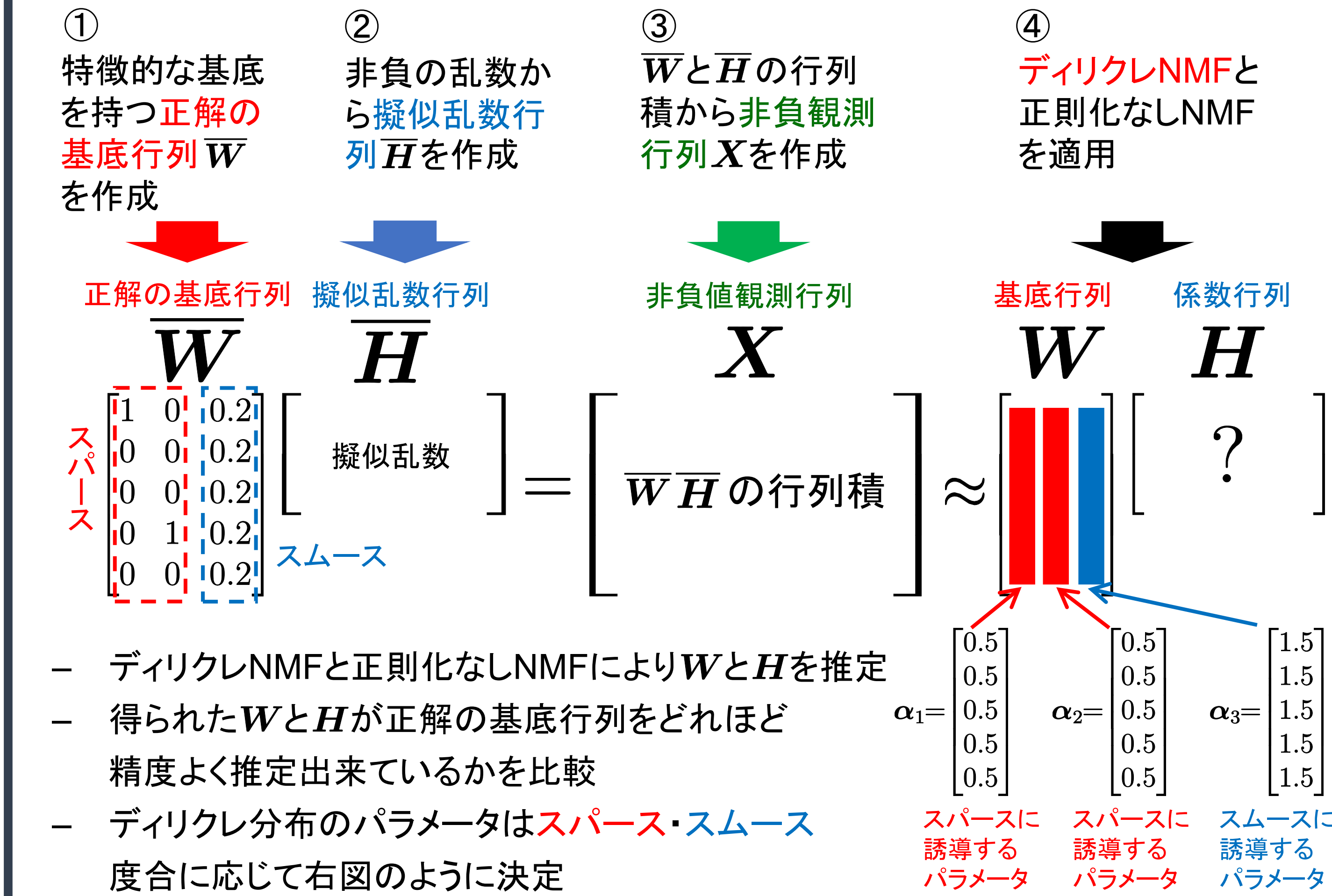
- ディリクレNMFの反復更新式

$$w_{ik} = \begin{cases} \hat{w}_{ik} & (\text{if } \hat{w}_{ik} \geq 0) \\ 0 & (\text{otherwise}) \end{cases} \quad \hat{w}_{ik} = \frac{w_{ik} \sum_j \frac{x_{ij}}{\sum_{k'} w_{i,k'} h_{k',j}} h_{k,j} + \alpha_{i,k} - 1}{\sum_{i \in \mathcal{I}_k} (w_{ik} \sum_j \frac{x_{ij}}{\sum_{k'} w_{i,k'} h_{k',j}} h_{k,j} + \alpha_{i,k} - 1)}$$

補助関数の最適化問題に対するラグランジアンLを考えたときに、 $\partial L / \partial w_{ik} = 0$ を満たす w_{ik} が非負となるインデックスiの集合 (k毎にこの集合を定義している)

4. 乱数を用いた数値実験

- 実験目的
 - ディリクレNMFの正則化の効果及び導出の正当性の確認実験
- 実験条件



- ディリクレNMFと正則化なしNMFによりWとHを推定
- 得られたWとHが正解の基底行列をどれほど精度よく推定出来ているかを比較
- ディリクレ分布のパラメータはスパース・スムーズ度合いに応じて右図のように決定

- 実験結果

正解の基底行列及び係数行列

Basis mat. (oracle)			Coef. mat. (oracle)											
1	0	1	0.2	1	0.417	0.3023	0.1863	0.5388	0.2045	0.6705	0.1404	0.9683	0.8764	0.03905
2	0	0	0.2	2	0.7203	0.1468	0.3456	0.4192	0.8781	0.4173	0.1981	0.3134	0.8946	0.1698
3	1	0	0.2	3	0.0001144	0.09234	0.3968	0.6852	0.02739	0.5587	0.8007	0.6923	0.08504	0.8781
4	0	0	0.2											
5	0	0	0.2											

正則化なしNMFで得られた基底行列及び係数行列

Basis mat. (simple NMF)			Coef. mat. (simple NMF)											
1	0.02527	0.7875	0.3726	1	0.1908	0.3024	0.1971	0.6257	2.22e-16	0.7339	0.3024	1.117	0.6972	0.2141
2	0.02097	1.424e-14	0.1805	2	0.935	0.1694	0.3375	0.3636	1.073	0.3982	0.01888	0.2418	1.134	0.0002197
3	0.9351	0.2203	0.01564	3	2.22e-16	0.06597	0.4161	0.6848	0.03104	0.5316	0.8722	0.6323	1.885e-07	0.9334
4	0.02097	1.16e-15	0.1805											
5	0.02097	7.385e-15	0.1805											

ディリクレNMFで得られた基底行列及び係数行列

Basis mat. (Dirichlet NMF)			Coef. mat. (Dirichlet NMF)											
1	0	1	0.2	1	0.417	0.3023	0.1863	0.5388	0.2045	0.6705	0.1404	0.9683	0.8764	0.03904
2	0	0	0.2	2	0.7203	0.1468	0.3456	0.4192	0.8781	0.4173	0.1981	0.3134	0.8946	0.1698
3	1	0	0.2	3	0.0001144	0.09234	0.3968	0.6852	0.02739	0.5587	0.8008	0.6923	0.08504	0.8782
4	0	0	0.2											
5	0	0	0.2											

5. まとめ

- ディリクレ分布を事前分布に仮定した正則化付きNMFの導出を行った
- 提案手法の効果と導出の正当性を実験的に確認した

原稿の誤りに関する訂正

訂正①

集合である。ラグランジアンは次式となる。

$$\mathcal{L} = \mathcal{J}^+ + \sum_k \lambda_k \left(\sum_i w_{ik} - 1 \right) \quad (12)$$

削除

ここで、 λ_k はラグランジュ乗数を表す。非負制約

訂正②

訂正前

以後、 \hat{w}_{ik} を求める。 $\partial \mathcal{L} / \partial w_{ik} = 0$ より

$$\sum_j \left(-x_{ij} \frac{\delta_{ijk}}{\hat{w}_{ik}} + h_{kj} \right) - (\alpha_{ik} - 1) \frac{1}{\hat{w}_{ik}} + \lambda_k = 0$$

を得る。これを整理して、 \hat{w}_{ik} は次式となる。

$$\hat{w}_{ik} = \frac{\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1}{\sum_j h_{kj} + \lambda_k} \quad (17)$$

また、式(15)より $\sum_i w_{ik} - 1 = 0$ を得るが、これはノルム制約 $\sum_i w_{ik} = 1 \forall k$ と等価である。このノルム制約に式(16)を代入して、次式を得る。

$$\sum_i \max(\hat{w}_{ik}, 0) = 1 \quad (18)$$

ここで、 $\max(\cdot, \cdot)$ は入力値の大きい方を返す。式(17)を式(18)に代入すると、 \hat{w}_{ik} の分母は非負値のため

$$\sum_j h_{kj} + \lambda_k = \sum_i \max \left(\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1, 0 \right) \quad (19)$$

が得られる。式(19)を式(17)の分母に代入してラグランジュ乗数 λ_k を消去すると、次式となる。

$$\hat{w}_{ik} = \frac{\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1}{\sum_i \max \left(\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1, 0 \right)} \quad (20)$$

訂正後

以後、 \hat{w}_{ik} を求める。 $\partial \mathcal{L} / \partial w_{ik} = 0$ より

$$\sum_j \left(-x_{ij} \frac{\delta_{ijk}}{\hat{w}_{ik}} + h_{kj} \right) - (\alpha_{ik} - 1) \frac{1}{\hat{w}_{ik}} + \lambda_k = 0$$

を得る。これを整理して、 \hat{w}_{ik} は次式となる。

$$\hat{w}_{ik} = \frac{\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1}{\sum_j h_{kj} + \lambda_k} \quad (17)$$

式(16)を考慮すると、式(17)で求まる \hat{w}_{ik} が非負になる要素のみ着目すればよいため、 $\hat{w}_{ik} \geq 0$ を満たすインデクス i の集合を k 毎に \mathcal{I}_k とおく。また、式(15)より $\sum_i w_{ik} - 1 = 0$ を得るが、これはノルム制約と等価であり、次式に書き換えられる。

$$\sum_i w_{ik} = \sum_{i \in \mathcal{I}_k} \hat{w}_{ik} = 1 \forall k \quad (18)$$

式(17)を式(18)に代入して整理すると

$$\sum_j h_{kj} + \lambda_k = \sum_{i \in \mathcal{I}_k} \left(\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1 \right) \quad (19)$$

が得られる。式(19)を式(17)の分母に代入してラグランジュ乗数 λ_k を消去すると、次式となる。

$$\hat{w}_{ik} = \frac{\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1}{\sum_{i \in \mathcal{I}_k} \left(\sum_j x_{ij} \delta_{ijk} + \alpha_{ik} - 1 \right)} \quad \forall i \in \mathcal{N}_k, \forall k \quad (20)$$